

## (その5) 近隣つきあいのタイプとその特性

○山崎古都子(滋賀大)、中野迪代(岐阜女大)

【目的】 緊急時における近隣ネットワークへの期待があるにもかかわらず、居住者の近隣つきあい意識は消極的である。本一連の研究はこのような状況を打開するために、住環境計画の側面から近隣関係を促進させる手法を提案するための基礎的研究である。既に近隣の人々が出会い、会話を交わすきっかけになる近私的空間条件と、さらに訪問をし合う関係まで一步踏み込んだ時に、気楽な訪問を誘う、あるいは反対に疎外するオモテの空間構成要素について明らかにしてきた。

本報告では、少し研究の方向を変え、これらの空間要素の作用の仕方を分析するために必要な、居住者の近隣意識のタイプ分けについて述べるものである。

【方法】 調査は阪神間の、開発後4-10年経過した戸建て住宅地域6地域に居住する夫妻両者を対象に1995年10月に実施した。回収数<男子267,女子314>世帯単位回収率66%。

タイプ分けにはwindows版SPSSによって林の数量化理論3類を用いた。

【結果】 居住者の近隣つきあいの必要性、志向、行動を指標に用いた数量化3類によって、近隣つきあいのタイプを①アソシエーション型、②ネイバーフッド型、③リミテーション型、④無関心型に分類することができる。これらは特に男性において、年齢、就労形態、休日数と強い相関が見られた。①と②は近隣つきあいを志向するタイプとしては共通しているが、つきあいに利用する場には反対の志向がある。気楽な出合いを可能にする縁側の空間は①③では敷地と道路の境界空間を、②は屋内空間を意識し、方向差がみられた。